

《正岡子規(36)の続き》その283

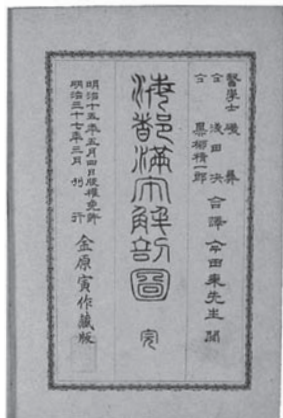
平岸 三八

またまた子規が咯血して診察を受けた山崎元修医師の關係する圖書を見出した。これも古本屋の目録に見出したもので、その書店は前述した秦川堂書店で、同書店の総合目録(平成19年9月号)のP35に番号302として、海都満氏解剖図として、写真版で載っているものである。同書店の目録には、山崎医師の纂著になる『産科要論』があることは前述した。なお同書店の住所は、101-0051東京都千代田区神田神保町2-3岩波書店アネックス2階である。

明治十四年に山崎医師が模写した解剖図が、同三十七年に翻訳され、出版され

302 海都満氏解剖図

磯・浅田・黒柳・今田東先生閣  
金原寅作蔵版  
明37 一冊 ¥三二、五〇〇



たのである。

コピーの如く、海都満の解剖図を三人の医学士が合訳し、それを東大解剖学助教授の今田 東が校閲し、現在も存在する金原書店から出版したものである。訳者の磯 尋、浅田 決、黒柳精一郎は、共に明治16年卒業の同期生である。なお、磯 尋は、小生所持の一九八九版東京大学医学部鉄門倶楽部会員氏名録には「尋」と誤って印刷されている。(尋も正字は尋である)

今田 東は生年不詳、明治22年(一八八九)歿。岩国藩士佐藤 逸の三男。出でて今田家の養子となる。始め箕作麟祥に師事し、明治5年第一学区医学校に入り、ドイツ医デューニッツに解剖学を修め、東大医学部助教教授となった。

コピーでご覧の如く、明治十五年五月四日版權免許とは、このとき原著者から翻訳権か出版権を得たものだろうか。しかし実際に刊行されたのは、明治三十七年三月で、二十数年後のこと、校閲者の今田 東は死亡して十数年を経過している。

そういう出版事情は分らないが、山崎医師が、明治14年にこの本を模写したというのは、原著を入手して模写したのであるから、解剖図を603図も模写したのであるから、大変な手数を要したのと思われる。

出版された解剖図の古書價もかなりな額で、小生は見送った。値段を云えば、出版されたものよりも、山崎の模写したものの方が高價である。

愚庵は子規よりも早く、万葉調の和歌を詠んだ。同胞を尋ねて、各国を流浪した愚庵が、いかにして、どの時期に万葉に近づき、どのような本によって万葉に親しんだかは明らかでない。しかし、与謝野礼蔵(与謝野 寛の父)、落合直亮(落合直文の義父)、福本日南、丸山作樂などという人々が身辺に居たから、それらの人の影響があるであろう。

子規が俳句革新を一応おわり、和歌の革新に着手し、「歌よみに与ふる書」を新聞「日本」に連載するのは、明治31年2月から3月にかけてである。

「貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候。(中略) 香川景樹は古今、貫之崇拝にて見識の低きことは今更申すまでも無之候。俗な歌の多き事も無論に候」などと痛罵した。

これを読んだ愚庵は、子規を危ぶんで、「余り言過ぎるは所謂口業(注・言葉より生ずるすべての悪業。佛家の語を作るものにして其徳を損ずる事多からんことを恐るる也)」と、「日本」の社主で親しい陸羯南に伝え、子規にも忠告の手紙を送った。「歌よみに与ふる書」の連載を許しながらも、羯南も同じ思いであった。非難の投書も多かったらしい。しかし、子規は耳をかさず、愚庵和尚のもとへととして、歌をそしり人をのしる文を見れば

猶ながらへて世にありと思へと応じたのであった。